社會間の集團的利己心を制約するものであるから反對的関係は常に調和され得ると説くが、この主張は誤謬である。蓋し各利益社會に共通せる道徳意識なるものは存在せないのであるから、それは各利益社會に於て異るものであると考へざるを得ないからである。かく考察するとき、共同社會の道徳意識は必ずしも集團的利己心を制約し、調和せしめるものではない。從つて各利益社會間の関係は相互に反対的であると見ねばならぬであらうと主張する。

これらの反対論に對して更に次の如く云はれ得るであらう。凡ての利益社會は共同社會と云ふ漠然たる無組織の社會を地盤とするものではなく、ある特定の集団を地盤とするものであると云ふ主張は誤謬である。何となれば、前にも一言せるが如く、我々は極めて多様な方法に於て相互に結合し且つ同時に多数の利益社會に属してゐるのであるから これらを支持する種々の集團は如何にして辨別され得るか。我々は會社又は労働組合の背後に特定の集團を予想しこれによつて利益社會が作られると見るよりも、共同生活を営んでゐる者の特定の関心又は目的が共同社會を地盤として、相互に結合されると見る見解がより合理的であると思ふ。

次に凡ての結社は、共同社會が有する全体目的に奉仕する機関ではないといふ反對論に対して次の如く言ふことが出來る。

一般に目的の類似が、調和と反対又は協働と競争をもたらすものであることは最も明白な社會原理である。目的の類似は必ずしも共同目的となるものではなく、屢々反対の原因となることもある。從つて利益社會の関係も一方調和的であると同時に、他方極めて反対的である事は事実である。併し、利益社會間の反対的傾向は調和的傾向よりも常に弱いものであると見ねばならぬ。若し然らざれば多くの利益社會は常に反対、闘争を繰返し、並存的、調和的協同的関係は不可能となるであらう。例へば益に労働組合と雇傭者組合とがあるとすればこれらの両組合は、共に類似せる一定の目的——共同所産の分配及び生産手段の共同管理等の目的——を有し、從つて一方協働すると同時に又反対する。而して現代の生産組織の下に於ては、雇傭組合も労働組合も共に生産に必要なる要素であり、この両者の協働がなければ生産は不可能となる。從つてこの両者は協働せねばならぬ。而してこの協働が常に反対に対して優勢である時に於てのみ生産は

可能である。生産が可能であるためにはたとへ反対が協働を破壊することがあるとしても、それは一時的現象として終り、次の瞬間に協働が生れ出ねばならぬ。今日の資本主義的産業組織に内在せる最も深刻な対立も、例へば競争者間に於ける対立、労資間に於ける階級闘争、農民と商工民との間に於ける利害の反対の如きものは要するに、協働が一時的に破壊されるとき起る現象であつて、その背後には常に共同目的とそれに対する協働が存在してゐることに注意せねばならぬ。こゝにたての利益社會は奉仕する機関であるといふ論據が発見される。

最後に道徳意識は、各利益社會が異なるに従つて異り従つて共同社會の道徳意識は必ずしも利益社會の集団的利己心を制約するものではないかも知れない。併し一概にかく述べることは出来ないかと思ふ。何となれば、前述せるが如く、共同社會は一定の共同規制が支配してゐる範囲を意味するのであるから、たとへ個々の利益社會が、個別的な道徳意識を有するとしても、それは究極に於て一層一般的であり、根原的である、共同社會の道徳意識に従属せしめねばならぬからである。若しこの道徳意識の優越性が、各利益社會の道徳意識の上に存在せなければ共同生活は不可能だからである。

かく考察するとき、利益社會相互間に於ける關係は、一見反對的であるが如く見えるが、その實、一層深き地盤に於て統一され、調和されてゐるものと見られるであらう。

第三項　集團と關係的結合

利益社會には、その存續の期間が一時的であり、その存續が不定的であるものとその存續の期間が永續的であり、その存續が固定的であるもの、例へば一時的會合の如きものと國家の如きものとがある。而してこの兩極端の社會間に程度上の差異を有する多くの利益社會があることは既に述べた通りである。これらの利益社會に共通せる事實は、その何れのものにせよ、それは個々人の間に於ける平面的な關係であると同時にある客觀的組織への立體的な關係であるといふこと

である。

更に人間の結合的形態には、この外に二つのものが考へられる。その一は人間と人間との結合が單に平面的であるに過ぎず且つそれに立ち入るもの、目的が極めて個別的であるもの、例へば師弟關係、友人關係、戀愛關係、売買關係

の如きものである。これは一般に、社會關係と称せられてゐるが、我々はこれを關係的結合と呼びたいと思ふ。次に人々の結合が平面的である点に於ては何等關係的結合と異らないが、その結合の目的が集合的なものに置かれてゐるところの結合形態がある。例へば職業、階級等の如きものがこれである。我々はかゝる結合形態を集團と呼ぶ。この集團はその性質が極めて一時的であり、不定的である利益社會と著しく類似してはゐるが、未だ何等の定体的關係を持たぬ点に於てそれと異り、單に平面的結合である点に於ては、關係的結合と類似してゐるが如く見えるが、その目的が常に集合的である点に於てそれと異つてゐる。かゝる性質を有する集團は諸利益社會の素地となることもあるが、必ずしもそうとは限らない。利益社會はかゝる集團が存在するとき、作られ易いが、凡ての利益社會の背後に常に集團が存在するというわけではない。要するに集團は漠然と共同目的を意識してゐる人々の流動的集合にして未だ結社を作る迄には至つてゐないものである。

第二節　社會の縦斷的構造

第一項　社会階級の意義

社會の構造は横斷的に考察されると同時に、縦斷的にも考察されねばならぬ。社會の構造を縦斷然に考察するとき、それは集團間に於ける上下的關係として現はれる。縦つて社會の縦斷的構造の研究は、集團の上下的關係の考察でなければならぬ。集團間の上下關係は、その關係が支配、服従的であるものと指導、支配的であるものとに區別される。前者は普通階級又は關係と言はれてゐるものであり、後者は指導關係と言はれてゐるものである。社會の縦斷的構造の研究に於ては當然これらの二關係が究明さるべきであるが、この場合我々は單に階級關係のみに就て考察するであらう。蓋し、階級關係は上下的關係の中最も重要なる關係であるからである。

社會階級（social class, sozial klass）とは一定の共同社會内に於て、比較的類似せる社會的勢力を有する被支の集團にして、上下的対立關係にあるものをいふ。この定義を次の如く説明するであらう。

一、社會的勢力

社會的勢力とは、個人的能力、經濟力、政治的權力のことであり、それが單獨に又は集合された姿に於て社會的に作用し、他人の服從を吸引し得る点にその本質がある。かゝる社會的勢力は、何人にも平等に分配されてゐるわけではなく、人々の遭遇と環境が異るに從つて異つてゐる。この社會的勢力の量的差異は自ら社會上に於ける生活の差異を導き、それは更に社會的地位の差異を來し、この地位の差異は、各々異れる地位に屬する者を集團的に分割する。この場合、その集團間に於ける社會的勢力は異らざるを得ないから、集團間の關係は上下的關係の下に置かれる。社會的勢力の差異が基礎となつて、上下的關係に置かれてゐる集團が社會階級である。

社會階級には、一の階級に屬してゐること、即ち自らの社會的勢力と社會的地位とが他人と類似してゐることを人々が自覺してゐる場合と、何等かゝる自覺を有せず、唯その人の有する究極的な社會的勢力と地位が如何なる階級に屬すべきかを客觀的に決定してゐる場合とがある。前者の如き階級は、マルクスの所謂「それ自體のための階級」（Klassen für sich）であり、後者の如き階級は「それ

自体に於ける階級」（Klassen an sich）に相當するものである。

二、上下的對立関係

階級は、上下的に對立せる集団であることを特徴とする。從つてその概念の中には、常に二つ又はそれ以上の社會的勢力を異にする集団の対立関係が包含されてゐなければならぬ。

この対立関係の本質は支配、被支配の事実に求められる。一の階級が成立し且つ存在してゐるところに於ては常にこの事実が發見される。集団間にこの事実がなく存在しないならば、そこに階級関係はない。対立関係は經濟、政治及びその他のあらゆる関係の内ちに存在するがその本質は集団的支配、被支配又は命令服從にある。

近代国家は階級的構成であると言はれてゐるが、その根據は一の階級が国家権力を独占し、他の階級を支配してゐる事実、即ち有産者階級が無産者階級を、單に經濟的関係に於てのみならず又政治的関係及びその他のあらゆる関係に於て、支配又はその意志に服從せしめてゐる事実に求められる。他方これと反對に、

無産者解放の運動は、單に経済的搾取からの解放を目的とするのみではなく、階級的支配からの解放を目的とするものであり。凡ての無産者運動がこの目的のためになされてゐる事実は階級的対立関係の本質が、集団的支配被支配にあることを示してゐるものと思ふ。

三、社會階級と身分

次に社會階級と身分又は族籍（Stand, Stat, Status）の差異に就て一言するであらう。この両者は、常識的にもまた学問的にも屢々混同されてゐるが、両者は[illegible]問上区別されねばならぬ。階級の概念の中に包含されると思ふが、併し階級を狭義に解釈するときは、この両者を同一概念の中に包含することは不可能である。

前述せるが如く、社會階級は社會的勢力の量的差異に基く集団関係即ち社會的勢力の多少に依つて決定される集團関係であるが、身分はこれと異り、政治的又は法制的制度となつて比較的固定化してゐる制度であつて、比較的流動的である社會的勢力の多少ではない。例へば封建国家の政治的又は法制的制度として規

定されてゐた皇族、華族、士族平民等の社會的地位は嚴密な意味に於ける社會階級ではなく、身分であり、今日の有産者階級、無産者階級は身分ではなく社會階級である。

社會階級を決定するものは社會的勢力の量的差異であるから、階級の編制は社會的勢力の分配の變化如何によつて、如何樣にも流動する。然るに身分は政治的又は法制的制度の一部分であるから、その流動性は、社會組織が根本的に變革されるに非る限り、極めて乏しい。社會階級の場合にありては何人も社會的勢力を獲得することによつて自由に一の階級から他の階級に移り得るし、又反對に社會的勢力を失ふことによつて、一の階級から他の階級へ移り得るのである。かゝる身分の場合に於てはかゝる自由は存在しない。社會階級は極めて開放的性質のものであるが、身分は甚だしく閉鎖的性質のものである。故に兩者の差異は、それが社會的勢力の差異に基く上下的集團であるか、若しくは政治的又は法制的制度に基く上下的集團であるといふ点に存する。又は後者は「單に法律的、政治的範疇の着物を着た階級と等しきもの」であると解せられるであらう。

四、社會階級とカスト

最後にカスト（caste, haste）は、身分並に階級と如何に異つてゐるであらうか。我々はカストを以て、宗教的に規定されてゐる集団関係であると考へる。印度等に於ては人間が如何なるカストに属するかは、彼が出生の時如何なるカストと発見したかと云ふ事実によつて運命的に決定される。ある一定のカストに生れたものはそれ以外のカストに属する者と結婚することを禁ぜられ、又他のカストの職業に従事することも禁ぜられる。若しカストのこの禁制を犯すときは、何人も単に苛酷なる社會的制裁を蒙るのみならず、神の怒りをも受けねばならぬ。かゝの如くカストは究極的に絶対者又は神の意志に基く集團層であると考へられてゐるがため、集團間に於ける流動性は絶対的に拒否されてゐる。即ちカストは最も厳密なる意味に於ける封鎖階級である。

身分も或る程度まで封鎖的性質を有するものであるが、身分は國家の意志に依つて決定された階級であるからその封鎖性は絶対者の意志に依つて決定されてゐるカストの封鎖性程絶対的のものではない。社會階級は身分やカストに比較されるとき極めて流動的であり又、開放的である。我々が普通階級と称してゐ

るのは、この開放的な社會階級に外ならない。

第二項　階級成立の要素

一、高田博士の所説

前述の如き意義を有する階級は如何なる要素によつて成立するものであるか。この問題に対する解答は社會學者　經濟學者及びマルキスト等各その立場を異にするに從つて異つてゐる。高田博士は「階級及び第三史觀」に於て階級を成立せしめる要素は社會的勢力の大小、即ち量的差異にあると見てゐるが、階級の差別的類似をもたらす要素として從來諸學者に依つて次の如きものが挙げられてゐると述べてゐる。

一、社會的勢力以外に於ける差別的類似
(い)利益の共同（ソンバルト、カウツキー）
(ろ)職業の共同（ボオエル）
(は)文化的類似（シュモラア）
二、社會的勢力に於ける類似

ハ、経済的勢力に於ける類似

A、性質的類似

(イ)、所得の源泉の同一（ロオリヤ）

(ロ)経済的機能の同一（マルクス

(ハ)、経済組織の代表的性質（ゾンバルト）

B、数量的類似

(イ)財産の大小有無（シュタイン）

(ロ)所得の大小（ロスバッハ

ニ、社會的勢力一般に於ける類似

(イ)、性質的類似

(ロ)数量的類似

(ハ)性質的類似

博士はこれ等の各要素を検討した後、その何れにも階級成立の要素としては不充分であることを述べ、最後に社會的勢力の一般に於ける性質的制約を有する数量的類似が階級の差別的類似をもたらすものであると結論してゐる。而し

て博士の意味する「社會的勢力」とは權力、富力、及び威力の三者であり、その類似とは、社會的勢力の性質的類似にあらずして、その量的類似の謂である。博士は「社會的勢力の類似が階級をなす所以は、社會の中に勢力の不平等があり、それに基く地位の移動があるからである」從つて「勢力の強弱、即ち其の數量的差異なきところに階級なし」と云つてゐる。

二、マルクスの階級論

イ　資本論に於ける階級論

今日の社會階級の研究に對する示唆は、マルクスから與へられたものが甚だ多い。併しマルクスの階級成立の要素に關する所說は、遺憾ながら明瞭ではない。階級構成の詳細なる說明を試みることが彼の意圖であつたことは「資本論」第三卷、第二部、第五十二章「諸階級」に依つて明かにされてゐるが、その意圖は最初の發端だけで、僅かに數十行にして彼の死と共に終つてゐる。資本論の「諸階級」の章の劈頭に於てマルクスは、それぞれ、勞銀、利潤及び地代を以て、所得源泉となしてゐるところの單なる勞働力の所有者たちと、資本の所有

者たちと、土地の所有者たち、換言すれば、賃銀労働者たちと資本家たちと地主たち―これ即ち資本制生産方法に立脚せる近世社會の三大階級を成すものである」と述べてゐる。併しその次の文章に於て、これらの三大階級の間には「中間階級」及び過渡的諸階級が存在してゐるがため、階級の限界決定を紛らはしくしてゐることを認めながら而かも階級の一般的傾向は上記の三大階級に向つて分裂しつゝあると云つてゐる。次に一の階級をなすものは何であるかと云ふ、自らの質問に対しては、何らの明答を與へてゐない。唯それに続く文章から「職業」の同一と所得又は所得源泉の共通性を以て、階級の要素と考へてゐなかつたことだけは明にされる。彼は次の如く述べてゐる。

「一見したところ、所得及び所得源泉の共通性といふことがそれであるやうに見える。即ちこれらの三大社會群のおの〳〵の組織分子、そのおの〳〵を形成するところの個々人は、それぐ、労銀、利潤、及び地代によつて、自己の労働力自己の資本、自己の土地所有を使用することによつて生活してゐると云ふのである」と。だがその直後に於て、この答を退けて曰く、かくの如き見地に立てば「醫師や官吏の如きも相異つた二階級を形成することになる。蓋し彼等は各一方の成

員たちの所得が、同一の源泉から流れて来る二つの相異つた社會群に所属してゐるからである」と云ひ、また同様のことが社會的分業に從事する労働者、資本家、地主の間に於て無限に分派する利益や地位にもあてはまると述べてゐる。例へば地主の如きも、葡萄園、農耕地、森林、鉱山、漁場等の所有者に區分され得るのであるから、これらのものを各々の階級と考へることは出來ぬ。

これによつて見ると、マルクスは職業の同一や所得の源泉の共通性を以て階級成立の要素であると見てゐないことが明らかとなる。然らば彼の階級成立要素に関する説明は如何なるものであるか、この説明は資本論以外の彼の著作に求められねばならぬ。

口、その他の著作に於ける階級論

マルクスは道徳化的批判と批判的道徳」の中に於て、「ブルジョア的生産関係は、階級関係である。從つて此の生産関係の変更或ひは全廃は、この階級の変更又は其の変化した関係からのみ発生し得るものである」と述べ、また「文明の始つた其の瞬間から生産は、職業、族籍（Stands）階級の対立を基礎にして終には蓄積された労銀との対立を基礎として成立ち初める。対立がなければ進歩も

[illegible]こを文明が今日まで経過し来つた法則である。現在までの生産力は、此の階級対立の基礎の上に発達したものである」と云つてゐる（哲学の貧困）

更に「現代即ちブルショア時代は、階級対立の単純化を以て其の特徴とする。全社會は、多々益々二大敵対的陣営、相互に直接対立する二大階級、即ちブルジョアジーとプロレタリヤとに分裂しつゝある。」「ブルジョアジー即ち資本家階級の発展と同一程度に於て、プロレタリヤ即ち現代的労働者階級が発展する」「若しプロレタリヤがブルジョアに対する闘争に於て必然的にそれ自体を階級に団結し、革命によりて自ら支配階級となり、支配者階級として、強制的に旧生産関係を廃止するならば、それは生産関係と共に、階級対立の存在條件を廃止し、階級並に固有なるその支配権を悉皆廃止することになる」と述べてゐる（共産党宣言）。上述の如き所説を綜合し考へるとき、マルクスは、職業の種類または所得の源泉の共通性等に階級成立の要素を求めず、経済活動に基く社會関係即ち社會生産関係にこれを求めてゐるが如く思はれる。具体的に言へば資本所有者と、資本を有せざる無産者とが、等しく生産関係に参加するとき必然的に其の職業に差異が生じその差異が社會的地位を相互に異ならしめ、茲に社會階級が成立

ラと見てゐるのである。即ちマルクスに依れば階級は経済的観念以外の何物でもない。故にプハリンはその「史的唯物論」に於て、「社會階級とは生産に於て同様の役割をつとめ、生産過程に於て他の人々に対して同様の関係に立つ人々の総体である」と定義してゐる。此の場合、物にその表現を見出すことも同様の見解は又ケノールに於ても見出し得る。

三、結論

マルクスの見解に依れば、階級の要素は、社會的生産関係に於ける各人の経済的機能の類似及びそれによつて決定される社會的地位の類似である。果して社會階級は、生産関係に於ける経済的機能の類似のみによつて決定されるものであらうか。我々は経済的要素が社會階級の成立に於て営む重大なる役割をマルクス及びその信奉者と共に認めるものであるが、併しこの要素が有力であるといふことのみを以てこの要素が全能の又は唯一の要素であると見る見解には賛成し得ないのである。有力であるといふこと、全能又は唯一であるといふことは区別されねばならぬ。換言すれば我々は経済的要素が階級成立の一の重要な

すると見てゐるのである。即ちマルクスに依れば階級は経済的観念以外の何物でもない。故にプハリンは[illegible]史的唯物論[illegible]唐階級[illegible]様の役割を「とめ、生産過程[illegible]は此の場合、物にその表現を見出[illegible]同様の見解は又[illegible]

三、結論

マルクスの見解に依れば[illegible]階級の要素[illegible]物機能の積似を[illegible]會階級は[illegible]生産関係[illegible]

[illegible]

[illegible]

要素であることはこれを承認するが、それと同時に、それが唯一の要素であるとは考へず、その他の要素をも同様に認めんとするのである。

階級の成立を歴史的に考察するとき社會進化の初期の段階に於ては個人的能力、―性別、年齢、腕力、智力―等が經濟的分化を決定し、ある時代に於ては征服關係に於て發生した權力が經濟的分化を決定し、他の時代に於ては殊に現代に於てはこれらの場合に於けると全く反対に、經濟力が個人的能力並に權力の分配を決定してゐることが明となる。歴史的には經濟的要素は必ずしも階級構成の唯一の要素ではなかつたのであるし又現在に於てもそうである。故に我々は高田博士の所説に從ひ、經濟的要素、即ち經濟力以外に權力及び個人的能力等の要素をも等しく階級成立の要素として認め、これらの要素の綜合的姿において社會的勢力の量的差異が集団間に存在するとき、そこに社會階級が成立するものであることを認めんとするものである。

これらの社會的勢力の要素の組合せは、時と場所とを異にするに從つて異り決して固定的のものではない。歴史上に於てその組合せの重点は常に流動し時としては個人的能力が、時としては權力が重点に置かれ又他の場合に於ては經

済力がその重点に置かれる等種々の場合が見られ得る。而して現代に於ける社會的勢力の重点が主として経済力に置かれてゐることは云ふまでもない。併しこのことを以て、直ちに社會的勢力は常に必ず経済力を重点としてのみ分配されるものであるとしてはならぬ。蓋しかく考ふるときは階級成立の他の要素を無視する結果に落ち入らざるを得ないからである。

第三項　階級間の関係

一、階級闘争説

階級間の関係については、大体二説が有力である。その一は階級闘争説であり、他は階級支配説である。階級関係を徹底的に闘争的であると見る点で従来の歴史は階級闘争の歴史である」と言つたマルクス及びエンゲルスは、前者の代表者である。マルクスに依れば、歴史は社會的必然に基く階級の成立及び階級間の闘争に由つて進展し行くものである。故に奴隷制度の没落から生れ出た封建制度の社會も、また封建制度の崩壊から生れ出た資本主義社會も一様に階級対立の社會である。資本主義社會は、私有財産制度をその基調とし、極度の経済行

為の自由を認め、大資本に依る大企業とその特徴としてゐる。この社會に於ては生産手段の所有者、即ち資本家と生産手段の非所有者即ち売るべき労働力以外の何物をも有せざる労働者の二大階級が発生する。この二大階級はその利害を異にするがために必然的に対立し闘争する。

かくの如き階級闘争は、先づ生産物の分配に當り　各階級に分配されるその分量に内存する矛盾として表現される。生産の分配に當り　各階級が出來るだけ自己の階級の分配量を大ならしめんとする欲求は、當然階級的利益の擁護に向ひ、茲に利益の衝突を來し、それは闘争とならざるを得ない。この闘争は資本主義社會の進展と共にその内在的矛盾を拡大し、階級意識を強めるに従つて尖鋭化する傾向を持つ。のみならず産業の急速な発達、及びこれに伴ふ資本の集中の過程は、必然的に無産者の数を激増せしめ量的大衆としてのその社會的勢力を増大する。又産業の発達に基く機械の発明、その進歩は、労働を単調且つ不愉快ならしめるのみならず、益々の労働者の賃銀を一定の水準にまで低下せしめ、或は無数の失業者を輩出せしめるに至る原因となる。更に資本主義社會に特有の生産の無政府状態、これに基づく激烈なる競争、生産過剰、

恐慌等は、産業を常に不安なるものたらしめ、労働者の生活を不断に脅威する。

かゝる状態の下に置かれる労働者は、自らその無力を意識すると同時に自衛的方法として大同團結の必要を痛感し、所謂「それ自体の為めの階級」となつて資本家階級に対立する」これに対して資本家階級も又その自衛上等しく大同團結して労働者階級に対抗するに至り、茲に階級闘争は日常事と化す。かゝる意味に於て階級間の関係は闘争関係であると言はれ得るであらう。

二、階級支配説

この主張に対し我々は、階級間の関係を支配、被支配関係であると見る。我々は階級があれば常にそこに成立する関係は闘争関係であるといふ見解に対して、それは支配、被支配の関係であるといふ見解をとる。その理由は、階級闘争が起る直接的原因に於ける利害の衝突、殊に経済的利害衝突であるかも知れないが階級が存し、階級的利害が相反すれば常にそこに闘争があるかといふに必ずしもそうでない。階級的利害が相反しても、何等の闘争も起らない場合があるが、併しそこに支配、被支配の関係が存せないとは云ひ得ないであらう。

又今日の階級闘争はその主たる形態に於て、経済闘争であるかの如き觀を呈してゐるが、階級闘争は單に直接的目標であるにすぎないのであつて、その究極的目標は常に階級的支配の絶対的排撃に置かれてゐる。この事実は又階級間の関係が支配、被支配の関係であることを示すものであり、闘争は單にこれを排撃するための方法にすぎないことを示すものではなからうか。例へば有産階級は、無産者階級を支配せんとし、闘争し、無産者階級は有産階級の支配から免れ又は有産者階級をその支配下に置かんとして、潜在的又は顕在的に闘争してゐるのである。即ち闘争は完全なる支配への、又は支配から免れるための手段としてなされてゐるにすぎない。この事は無産階級の闘争が大体二つの方向になされてゐる事実に依つて明かにされる。先づ第一に闘争の目的が單なる労働條件の改善の如きものになする場合、その闘争は決して支配、被支配の関係を拒否してゐるものではない。支配、被支配の関係を肯定しつゝ、その下に闘争がなされてゐるのである。従つてそこでは、依然として階級関係が継続される。第二に、第一の場合とは異り、階級闘争の目的が階級的支配の絶対的排除―階級の止揚―にあるときは被支配階級は支配、被支配の関係を肯定せ

お闘争によつて無階級的社會を實現せんと計る。併しこの場合に於ても、かゝる社會が眞に存在せざる限り、即ち階級社會が存續してゐる限り、支配の可能も又、彼支配の可能も依然として存續すると見られねばならぬ。

かく考察するとき、階級間の關係は、支配、被支配の關係であることが明となるであらう。歴史を通じて、階級闘爭の究極の對象となつたものは正に支配の獲得であつた。階級闘爭が常に經濟的闘爭から政治闘爭へ進展する所以も又玆に發見されるであらう。

第七章　社會の統制

第一節　社會の統制の意義

社會は常に何等かの狀態の統制を必要とする。統制がなければ、社會の秩序は維持されず、ために社會生活は不安定となるか又は不可能とならざるを得ないであらう。從つて社會と社會の統制との關係は、恰も建築物に對するセメント」

の如き関係である。統制そのものは、社會を成立せしめるものではないが、それは一旦成立せる社會に秩序を與へ、その存続を確保するところのものである。

社會の統制とは、社會の全体的目的のために、社會の優れた力を以つて成員の活動を命令し、又は禁止することを意味する。即ち社會の統制とは、社會の全体又は其一部分に対し、或はその成員に対して社會全体の立場に於て有害と見做れる活動を禁止し、有益と見做される活動を命令することである。後者は積極的統制であり、前者は消極的統制である。その何にせよ、かゝる統制は社會全体と成員との関係並に成員相互間の関係に統一を與へ、結合の強度を増加するものである。

社會の統制は、恐らく多くの方法―宗教、道徳、教育、法律等―に依つて行はれるであらうが、その中最も重要なるものは社會意識による統制と、社會組織に依る統制である。先づ社會意識の統制作用について述べるであらう。

第二節　社會意識の統制

第一項　社會意識

社會意識（*Sozial bewusstsein*）は集団意識（*gruppenbewusstsein*）集団精

神（Gruppengeist, group mind）又は集合表象（Repräsentationen collectives）とも称せられてゐる。この意識は一般に個人意識が個人を基礎とする意識であるに反し、社會を基礎とする意識であり、従つてある特定の社會に特有な意識、又は精神又はイデオロギーを意味すると解せられてゐる。

一　実在説

社會意識に関して、全然相反する二つの学説が対立してゐる。その一は社會意識実在説であり、他は社會意識名目説である。実在説によれば社會意識は個人から独立して個人の外部に存在する客観的意識である。それは社會の成員としての個人が新陳代謝するにも拘らずそれとは無関係に存続し、且つ個人に対して外部的に作用する意識である。それは超個人的、客観的存在として個人の思惟、行動、感情の様式を規定する意識である。故にこの意識は屢々客観的精神又は意志とも称せられてゐる。その超個人性及び客観性が極端に誇張せられて神秘的な精神又は宇宙的精神と称せられることもある。併し社會意識を不可解な、神秘的な精神と同視することは或は誤謬でないかも知れないが我々の

らざるところである。何となれば我々は飽く迄社會意識を、實証的　經驗的に研究せんとしてゐるからである

實証的、經驗的に、社會意識を考察するとき、それは個人意識とは異り　又個人意識の總和とも異る一種の化學的結合の如き性質を有する意識即ちその個々の要素とは全然異れる、新たなる性質を有する意識として現はれる。デュルケイムはこの点に就て次の如く述べてゐる。即ち全體は部分なくしては存在し得ないが、全体は部分の單なる集合ではない　人類は一定の形式の下に永續的な紐帶に依つて結合されるとき、そこに特自の性質と独自の法則とを有する一の新らしき存在即ち社會的存在を作るものである。これが　所謂集合表象（représentations collectives）又は社會的事実（faits sociaux）と称せられてゐるところのものであり、個人の外部に實在し、個人の行動、思惟、感情の様式を拘束し又は決定するところのものである。かゝる性質を有する意識は、個人意識の中にのみ存在する心的現象とは明に異る別種の現象である。

折しデュルケイムは社會意識の要素としての個人を否定してゐるのではないが、唯彼は個人が社會生活を営んでゐるところに於ては、そこに個人現象とは全く異

る新現象が生起し、その新現象は個人意識外に客観的に実在し、個人意識に対して外部的に作用し、個人意識の大部分を形成してゆくところのものであると見んとするのである。かゝる見解に依れば、社會は、個人なくしては絶対に在し得ないのであるが、而も個人は社會の形成者と見られるよりは、寧ろ甚だより大いなる程度に於て社會に依つて形成されるもの即ち社會の所産と見られるのである。

社會意識を超個人的客觀的実在と見、これを形而上学的、神秘的に取扱つたもの、代表者はヘーゲルであり、これを経驗的、社會学的に取扱つた者の中にはデユルケイム以外にエスピナス、リンドネル、ギデンクス等の多くの社會学者が数へられる。

二、名目説

社會意識名目説は実在説とは反対に、社會意識を全然個人心理的に説明せんとする。社會実在論者が主張するが如く、社會意識は超個人的客觀的実在であるとしても、それを全然個人意識と無関係に実在する意識であると主張する

ことは誤謬である。社會以前に先づ個人が存在して居り、社會を形成する欲望と思想とは個人から流れ出たものであり、凡て社會目的と称せられてゐるものは結局個人の目的以外の何物でもない。これらの事実は社會意識を以て社會を基体とする意識であると主張する事が誤謬であることと裏書するものであり、且つ個人意識に対して客観的に実在するところの社會意識の存在を否定するものである。所謂社會意識と称せられるものは、多数の個人意識が特殊な状態の下に置かれた時に、特殊な刺戟を受け特殊な反應をした結果生じた現象に外ならない。従つて個人的心理現象とその根本的な点に於て何等異るものではない。唯理作用としてはたゞ個人心理作用のみが存在するのであり、個人意識と區別さるべき社會意識は客観的に実在するものではない。寧ろそれは個人意識の特定の状態として見られねばならぬ。ジンメル（Simmel）ブレニ・ナー（Brenner）マキアヴェル（Machiavel）等の主張がこれである。

三、社會意識の意義

上述せる如く、社會意識実在説は、社會意識を以て、個人意識の化学的結合と見

るのであり、且つその客観的実在を主張するのではあるが、社會意識名目説は孰ての意識は究極に於て個人意識に還元せらるものであることを強調し、社會意識の客観性を否定せんとする。併しこの両説共余りに極端であるといはねばならぬ。

然らば我々は、社會意識を如何に理解すべきか。

我々はデユルケイムが指摘して居るが如く、我々の意識内容を分析するとき、そこに二種の異れる意識が存在することを認め得る。その一は個人的なものであつて、個人を特徴付け、自己と他人とを區別する根據となるところのものであり、他は社會的のものにして、社會生活を営んでゐる大多数の者に共通せる意識である。而して前者は我々の個人的人格を代表する意識であり、後者は社會意識と称せられてゐる。而してデユルケイムに依れば、個人意識は主として個人がその中に生活してゐる社會によつて與へられた意識であるから、社會意識程重要なものではない。デユルケイムはかくの如く極端に社會意識を重視する。併し果して個人意識は社會に依つて與へられた意識であるであらうか。恐ら

くそうではない。個人意識の素地は社會に依つて與へられるとしても、それを受け入れるべき構造をもち、それを概念に構成する力を具へてゐるものは、個人意識そのものに外ならない。若し個人意識がかゝる構造を有せないとすれば社會意識が成立する可能はない。從つて凡ての意識は個人意識であると云ひ得る。

併し凡ての意識が個人意識であるといふことは、必ずしもその意識内容には種類があるとか云ふ見解を否定するものではない。我々の意識内容の中には個人に特有なものと、社會の多數者に共通せるものとがある。この二種類の意識内容が、同一個人の意識内に於て対立するとき、後者は前者に対して客觀的にして独立せる地位を保ち、前者を拘束する外部的な力として經驗せられる。換言すれば後者は等しく自己の意識内容であり乍ら而も自己が自由になし得ざる意識内容にして現はれる。この種の意識内容を我々は社會意識と称するのである。

かくの如き多數者に共通せる意識内容としての社會意識は人間と人間との間に於ける心的相互作用を通してのみ作り出されるのであるから社會意識の性質、

は極めて、社會的、歴史的である。我々が如何に行動し、思惟し、感情するかといふことは全然個人的事象の如く見えるが、それらの行動、思惟、感情は、常に直接的又は間接的に行はれてゐる行動、思惟、感情の様式の影響を受ける。從つて全く個人的であるが如く見ゆる個人の心理的作用もその実、社會的、歴史的な心理的な内容即ち社會意識に依つて制約せられてゐるがために、社會意識が客觀的に実在してゐるが如く考へられるのである。

社會意識は、社會の多數者に依つて共通に把持されてゐる意識内容であるが、と、に注意せねばならぬことは意識の作用と内容とが混同されてはならぬと云ふことである。意識の作用と言ふ場合我々は經驗することまたは單なる心理作用を意味し意識の内容と言ふ場合我々は經驗せられたるもの即ちその作用の結果をも意味する。我々が相互に共通せる心理的内容として持つてゐるところのものは、心理的作用ではなくその結果としての内容である。作用そのもの即ち現実に經驗すると言ふことそれ自体は個人的なものである。併しその内容は極めて社會的のものである。かゝる意識内容が社會の多數者によつて共通に持たれて居る場合、それを社會意識と言ふのである。

これらの共通せる意識内容の共通性が相互に意識せられるとき、その意識内容は、それを持つ者に対して拘束力を持つに至る。例へば我々は、我々の遺伝的特性基く共通的意識内容、慣習、道徳、法律、書物等の如き比較的固定せる意識内容、輿論、傾向の如き比較的非固定的なる意識内容、又夫々特定の集團を中心として存在してる集團的感情——忠義、愛郷心の如き——意識内容が我々を拘束力を持つてゐる所以は、これらのものが單に共通に我々の意識のうちに存在してゐるといふ事のみではなく、共通に存在してゐるといふ事が相互に意識されてゐるがためである。かく考察するとき、社會意識は社會の多数者に共通せる意識内容であつて、その共通せる事実が相互に意識されてゐる意識内容であるとも定義し得る。從つてそれは個人心から独立して客觀的に実在する意識といふが如きものを意味せず、又個人の意識内容をも意味せず、意識内容の特定の種類を意味する。これを要するに、社會意識は社會の成員の多数者に共通せる意識内容であつて、その共通せることが相互に意識されてゐるが如き意識である。併し意識内容の共通性は極めて相対的のものであつて、絶対的のものではない。理想的に言へば社會意識は、社會の成員の凡てに共通せる意識内容であるべき

であるが、かゝる状態が現実に存在することは稀である。寧ろそれは社會の成員の一部に共通せる意識である場合が多い。即ち社會意識は必ずしも全体意識（gesamtbewusstsein）ではない。從つてそれは寧ろ、ある一部分の成員に共通せる、集合意識（kollektivbewusstsein）である。と見られてゐる社會意識が屢々階級意識であるのはこれがためである。フイアカントが社會意識をこれらの二種類に區別したことは正當であると言はねばならぬ。

四、社會意識の特徴

イ、拘束性　社会意識には二つの特徴がある。その一は社會意識の外部性であり、他はその拘束性である。社會意識の拘束性とは何であるか。前述せる如く社會意識は社會の大多数の成員に共通せる意識であり、且つ共通せる意識なることが意識されてゐる意識である。從つてかゝる意識は特定の社會に於ては優勢なる意識である。フイアカントが述べてゐるが如く、個々の成員を行爲者と考へるならば、その行爲者を取り囲む多数の傍觀者の意識は社會意識として作用する。我々が行爲する場合　自己の欲求のある部分を抑制して出來るだけ、

社会の規準に順應する所以のものは、自己の周囲に自己を監視し又は批判してゐる、無形の優勢なる傍觀者があることを意識してゐるからである。この傍觀者は、社會の力又は精神を代表するものであり、凡て行爲者はそれらの支配と拘束から免れることは出來ない。而してかゝる力の支配を我々が受け又はその力が社會に存續する所以のものは、その力が要求するところが、必ずしも我々の要求と丸て合致し、或は特に價値多きものであるとは考へられるからではない。勿論かゝる場合もあり得るであらうが、それにも優つて重要な事は、かゝる力が社會全體のための力又は不可欠の力であると言ふことである。蓋し我々の共同生活には一定の規制が必要であり、その規制は多數者に依つて意識的又は無意識的に欲求せられ、それは共通せる無意識内容となり、凡ての人に反映し凡ての人がその命令に服從することを要求するからである。我々はこの場合、共通せる意識内容といふことによつて、自己がこれを抱くときは他人も亦、これを抱かんことを欲するが如き意識内容であるか否かは、社會意識と個人意識とを論理的に區別する規準で

ある。我々が一定の意識内容を有するとき、他人も又これを抱かることを敢て欲せざるが如き意識内容であれば、それは全く個人的な意識であつて、社會意識とは言ひ難い。然るに我々が一定の意識内容を抱くとき、他人も又これを抱かんことを切望するが如きものであれば、それは多くの場合多人数によつて共通に抱かるべき又抱かれ得る傾向を持つ意識内容である。例へば國家、市町村の安寧幸福、名誉等の如き、これである。而してこれらの意識内容は人々が相互に要求し、又は要求せられるところのものであるから、それは多人の場合個人意識に対しては優勢なる意識として現はれる。従つて何人もその意識の支配を受けざるを得ない。若しそれに應せざるものがあるときは何等かの拘束を受けざるを得ない。かくの如く、社會意識がその支配に反抗する者に対して加へる社會的制裁が社會意識の拘束である。

社會意識の個人意識に対する優越性デュルケイムに依れば三方面に於て見られ得る。先づ第一に時間並に空間に於ける優越である。即ち集団表象（社會意識）は前個人的、外個人的であるが、故に個人の出生以前から存在し、何れの個人にも屈せず、個人から独立して存在し、個人の死後に於ても尚存続し、人々の

思惟、行動、感情の様式を規定するところのものである。第二に個人は、社會に比して量的に劣れるものであるから個人意識の化学的結合であるところの集団表象は個人意識に優越する。第三に、集団表象は　表象の生成過程に於ける最終的所産であるがために個人意識に優越する。即ち集団表象は　個人表象が結合して成つたものであるから意識の意識であり、意識の最高形式である。從つて個人表象に対して優越する。

デュルケイムの所説は、やゝ極端に亘る嫌はあるが、我々はかくの如き優越性を拘束性が、社會意識に存在することを認めざるを得ない。而して社會意識にかゝる性質があるがために、それによる社會の統制が可能であることも又認めざるを得ない。

ロ、外部性　社會意識の他の特徴はその外部性にある社會の成員の多数者に共通して存在する意識はそれが多数者に共通せる意識内容であるの故に客観化する傾向を持つてゐる。即ち個人意識に対して外部的存在となる傾向を持つてゐる。例へば一定の意識内容が、社會意識となるときは社會の成員の新陳代謝にも拘らず又社會の成員が之を抱くと抱かざるとに拘らず常に

客觀的に存在し、之を抱かざるものに対しては外部的拘束を加へて之を拘かざるを得ざらしむるに至る。之を社會意識の外部性といふ。

かくの如く、客觀化した社會意識は更に進んで凝結し、ある標徴を以て示されるに至る。その客觀性は益々明瞭となる。例へば、宗教に於ける殿堂、経典の如きもの、國民精神に於ける訓言、人生觀の如きもの社會意識の凝結物又は沈澱物であり、その客觀性は極めて明瞭である。

第三項　社會意識の拘束力の種類

一　外部的拘束力

総ての社會意識は、何等かの拘束力を有するものなることは前述せる通りである。社會意識の拘束力は、之を分かちて、内部的拘束力と外部的拘束力とすることが出來る。先づ外部的拘束力に就いて述べるであらう。

抑々凡ての社會意識の内容は、社會の規範たるの性質を有してゐる。而してこの社會意識の規範性が結局社會意識の拘束力の根源となるものであることは

既に述べた通りである。故に社會はその統制上、社會意識の規範性を根據とし社會意識の拘束に服從せざるものをそしく彼等が社會生活全般に及ぼす影響の重要さの程度に從つて制裁する。社會の制裁のうち、最も典型的なものは法律に準據して課せられる刑罰である。

併し、社會の制裁は單に法律に依る刑罰のみではない。この外に多くの制裁がある。デユルケイムは社會的規範の重要さの内容を明瞭へ(clearness)並に緊密へ(intense)の二者とし、社會意識の制裁は社會組織に對する違犯がその兩性質を有するものであるか、又はその一を欠くものであるかに依つて段階付けられると考へた。その積極的なる場合に於て法律に依るもの、外、私刑(lynch)總て非難、侮蔑、或は社會的地位または名聲の剝奪等の如き、精神的並に物質的不利益が與へられる。その消極的な場合に於ては義務の履行を直接強制するに止まり、進んで不利益を與へざるが如き場合である。例へば法律に定めたる義務の直接強制の場合の如き、また或る慣習を破つた者を村八が挙つて強制的に改めさすが如き場合がこれである。かくの如く社會意識の制裁には種々なるものがあり得るが、その如何なるものにせよ、社會

意識がそれに違反せるものに対して與へる制裁である点に於ては同一である。而してこれ等の制裁は、常に外部的である。それが外部的である所以は制裁は常に社會意識の支持者に向はずして支持者以外の者即ち違反者に対してかへられるためである。換言すれば、社會意識の制裁は社會意識に外部的関係に立つ者に対してのみ與へられる。

二、内部的拘束力

社會意識の拘束力は、單に外部的にのみ作用するにあらずして、内部的にも作用する場合もある。それは如何なる場合であるか、それは社會意識と個人意識とが同一個人の意識に於て予盾衝突する場合に起る現象である。即ち同一個人の意識内に於て、一方が他方を拘束せんとし、他方がこれに反抗せんとする場合に起る現象である。我々は、日常自己の自由意志に從つて思惟し、行動し、又感情してゐると考へてゐるが、決してそうではない。詳かに我々の思惟、行動、感情の様式を反省して見るとき、それ等の如何に社會意識の拘束を受け或はそれによつて制約せられてゐるものであるかが明となる。例へば吾々は日常の寢食、起居等

如き比較的個人的自由の範囲が広い行為から経済、政治等の如き然らざるものに至るまで社會意識の厳重な監視と拘束とを免れることは出來ないことを知る。吾々が自由であると考へてゐる思惟、行動、感情も、厳密な意味に於ては決してそうではない。たゞ默示的または明示的な社會意識の支配の下に、如何なる思惟・行動を擇択すべきかの自由を有してゐるにすぎない。而して若し一度社會意識の支配に違反して擇択の自由を行使せんとするときは、一事実、我々は何等の外部的制裁を受くることなくして、容易に之に違反し、得るのであるが——我々の意識内に於ける社會意識の強烈なる反抗に遭遇し、不安を感じ、或は不愉快を覚えざるを得ない。而かも我々が社會意識に服従することを余儀なくせられる所以のものは、若しこれに違反すれば、我々の個人生活、延いては社會生活がその安定を失ひ、愉快なる生活の持続を困難ならしめるからである。かくの如き不安又は恐怖の念が内部的拘束力であるのものは、社會學的には上述の如き拘束力を有する社會意識に外ならないであらう。

第三節　社會組織の統制

第一項　社會組織の意義

一定の社會意識が醸醸せられた場合に於ても、單にそれのみにては未だ充分に社會の秩序を維持統制することは困難である。社會の成員數が多い時には、社會意識はそれが、一定の方向に按排配列せられて始めてその統制作用を全し得る。法律意識等の場合に於ては、特にそうである。こゝに於て社會組織の必要が起る。

社會組織とは、社會目的実現のため、按排配列即ち組織された、常規的な相互關係であると定義されるであらう。およそ社會があれば、そこには常に何等かの慣習的關係が存在し、それが社會の秩序を維持し、または社會を統制する。特に人口が少く、且つその組立が比較的同質的である原始社會及び未開社會に於ける統制は、慣習的關係に依るものが極めて多い。しかるに社會の人口が增加し、社會關係が複雜化するに從ひ最早之等の慣習的關係のみに依つて、社會の秩序を維持統制することが困難となる時は、こゝに等の關係が按排配列され組織化されるに至る。かく按排配列された慣習的關係のことを我々は組織といふのである。換言

すれば、社會組織とは、組織された常規的な相互関係に外ならない。この場合組織の方向は常に全体的社會的目的に向けられるものであるから、社會目的実現のための組織であると解せられるであらう。

慣習的関係が按排配列せられるとことは、それが社會の目的に向つて、従屬並列の関係の下に置かれ、統一され、且つ類型化されることを意味する。例へば、国家に於て、上は主権者から下行政、軍事、司法及び教育等に関する最下級の機関に至るまで国家目的のために、相互の活動が整序され秩序付けられ且つ相互の関係が、従屬並列の常規的関係の下に規定されてゐる場合我々はこれを国家組織と呼ぶのである。

かゝる社會組織は、社會の内部的関係の体系であるにすぎないのである。従つてこの点に於て多数の社會間の相互関係の総体を意味する社會構造と區別せられる。例へば一の全体社會の内部を見るとき、そこには多数の社會―地方自治團体、政党、教會、學會、労働組合等々―が並存してをり、而かも一定の関係の下に統一されて一の全体社會を作り上げてゐる。この姿を我々は社會構造と云ふのである。これに反して部分社會の内部的関係の体系を

社會組織と云ひ社會構造と區別する。

第二項　社會と社會組織

社會組織は社會の存在を前提とする。高田博士が、無脊椎動物の内部に脊椎が形成して、それが脊椎動物となつた如く無組織社會の内部に社會組織が形成せられることによつて、それは有組織社會となる」と云つてゐるのは正當である。社會はその成立の最初から組織を有してゐるのではない。と云つて社會は永久に無組織のまゝで存續するものでもない。社會の全體目的に對する意識、この目的達成のためになされる成員の活動の規制は相互の關係と一定の定規的關係に組織する。かくて社會組織は、社會目的實現の手段として、必然的に社會の内部に形成せられる。併し、これは社會組織が發生的に見た場合であるが、社會組織は常に必ずしも社會の内部から北成するものとは限らない。社會組織が先づ人間的意識的に作り上げられ、然る後社會が生れ出づる場合もある。その最も著もしい例は株式會社の如きものである。株式會社に於ては先づその組織を定めた定款が創立總會前に發起人に依つて作られ、それが總會に於て承認され然

第二節　社会組織

社会組織とは社会の各部分が相互に関連し合って一定の秩序を保ちながら全体として統一ある姿を示すようになることをいう。社会組織は社会の内部における諸集団の関係によって成立するものであるから、社会組織の問題は社会集団の問題と密接な関係がある。

社会組織は社会の各部分が相互に関連し合って一定の秩序を保ちながら全体として統一ある姿を示すようになることをいう。社会組織は社会の内部における諸集団の関係によって成立するものであるから、社会組織の問題は社会集団の問題と密接な関係がある。

る後これに基いて會社が作られる。学會、組合等の如き利益社會も概してこの種のものである。

社會組織は以上の二つの過程によつて成立するものであると考へられるが、その何れの場合にせよ、社會組織には二つの要素が含まれてゐると高田博士は述べてゐる。その一は成員相互の慣例的関係であり、他は社會の機関である成員相互の慣習的関係の存在がすべての社會組織の一般的前提をなすものであることは前述せる通りである。次に機関であるが、機関は社會勢力の焦点、社會組織の最上位に位し、社會統制の遂行を委任されてゐるところのものである。かゝる意義を有する機関は二種類に區別される。その一は委任が、ある特定の個人に対してなされる場合と他はそれが集合的機関に対してなされてゐる場合とである。機関としての個人は、その生物学的性質の故に人格性を切断されてゐる。蓋し社會の存在は永続的であるが個人の存在は有限であるから若し代置し難い個人を機関とするときは、社會の持続は薄弱なものとならざるを得ないからである。これに反して機関が非人格的且つ無名的なものであるときは、即ち集合的機関であるときは、その機関の補填は容易であり、従つてその存続を確保し易から

しめる。故に一般的には、個人的機関よりも多数の個人より成る集合的機関がより重要であると見られてゐる。

凡ての機関には、常に一定の社會的勢力が集中してゐる。この勢力が機関に集中されてゐるがために、組織による統制が可能となる。然らばその社會的勢力とは如何なる性質のものであるか。それは社會意識の支持者の欲求が化成したと云ふのものである。社會全体の維持発展、成員相互の関係の按排配列等に対する欲求が機関に集中し再びそれは各成員に反対し成員を統制する。故に機関の有する社會的勢力は高田博士の云ふ如く成員が社會に捧げた力の集積以外の何物でもない。例へば株式會社の重役の社會的勢力は株主の寄與した戦力の集積であり、学会の主脳者が有する社會的勢力は、成員がこの社會のためにする服従の統計に外ならぬ。等々。事実この社會的勢力が機関に集中されてゐるがために組織に依る統制は可能である。

第三項、社會組織の統制作用

社會統制作用の中、主たるものは二であり、その一は社會意識に依る統制作用

である。

社會意識に依る統制は、如何なる場合に於ても、常に存在するのであるが、社會組織に依る統制は、その上に附加せられた統制作用であるから、その内容が如何なるものであるかは社會意識に依つては行はれず社會組織が加へられることによつて始めて行はれるが如き性質の統制であると解されねばならぬ。併しこの両者は相互に関聯してゐるものであるからその一を分離することは甚だ困難である。例へば社會意識の中には社會組織の有する力に依つて支持されてゐるものがある。国家の法律、社會や会社の規則等の如きは恐らく人の如きものであらう。実際社會意識は、社會組織を俟たずして存在し得るものであると同時に、或種の社會意識は、社會組織を持たずしてはその存在が明瞭となり得ない性質を持つてゐる。我々が法律や規則等と社會意識との関係を考察するときこの点は明らかになる。即ち社會意識の統制作用のあるものは著しく社會組織に頼るものであると言はねばならぬ。

更に社會組織の統制作用は、これを構成する機関が　社會的勢力を集中してゐると云ふ事実からして、法律や規則等と特定の場所に適用し、または支持する

ことによつて統制作用を営むのみならず社會意識の内容を決定することによつて統制作用を営む。例へば組織の機関が社會の全体の意識を構成することによつて迅速且つ詳細に社會意識を法律又は規則の下に反映せしむるが如き場合がこれである。かくの如く、社會組織と社會意識とは相互に相俟つて社會の統制をして効果あらしめるものである。

第八章　社會の存續

一旦成立した社會は継続的に存在する傾向を持つてゐる。社會の存續と云ふことによつて、二つのことが考へられる。その一は、社會の成員の継続であり、他は成員を相互に関係せしめてゐる社會紐帯の存續である。而してこの二種類のもの、存續は概念上區別して考へられるが、事実上に於ては不可能である。何となれば社會紐帯の存續は、當然成員の存續を豫想して居り、他方成員の存續は人間が単なる生物的又は物理的存在に非ざる限り、常に社會紐帯の存續を必要としてゐるからである。故に社會の存續は、此の両者の存續と相俟つて可能であ

ると言はねばならぬ。

然らば社會の存續とは、如何なることであるか。それは一定の社會に於て、その個々の成員、若しくは社會の紐帶の何れかの變化又は交替、或はこの兩者の變化又は交替があるも一定の限界内に止まり、社會が崩壞せずして繼續されることを意味する。いま一定の時期に限つてこれを見るに、上述の如き社會の要素に加へられる變化、またはそ皆の率が變化または交皆せざるもの、率よりも相對的に僅少である場合社會は存續すると考へられる。生物有機体が存續し得る所以のものは、常にそのうちで新陳代謝が行はれてゐるにも拘らず、一定の時期に於て代謝するもの、率が代謝せざるものに對する率よりも、比較的少ないが爲りである。社會の成員又はその紐帶の存續に於ても、これと同樣の原則が作用してゐると言ふことが出來よう。

一定の社會に於て、成員の存續があり得るのは、その社會に於て不斷に成員の補償が行はれるからである。死亡及び移住等は、社會の成員を喪失せしめる主たる原因であるが、他方出生及び他社會からの移住は此の喪失を補償すると

こゝのものである。而して成員の喪失に対する補償の割合が比較的大なるとき、即ち出生率が死亡率を超過し、又は他社會よりの移住者の数よりも多い時に於てのみ成員の存続があり得る。併し社會の成員の補償は、その結合の紐帯と分離しては考へ難いのであるから、関係主体としての成員の補償は、除々に行はれることを必要とする。蓋し若し茲に急激な成員の喪失があり、これに対して同様急激な補償がかりに何等かの方法で講ぜられたとしても、それは単に成員の補償があり、得たと云ふのみであつて、これに伴ふ結合の紐帯か同時に補償されたとは考へ難く從つて、そこに統一された社会があり得るか否かは疑問となる。故に成員の補償は、徐々に且つ一定の社會に固有の紐帯が維続される範囲に於て行はれねばならぬ。

上述せる所により、社會の存続は、成員の存続があるのみならず成員を関係せしめてゐる紐帯の存続も又必要であることが明らかとなつた。社會紐帯の変動も、成員の喪動と同様或一度の限度内に限られねばならぬ。若しこの一定の限度を越えるときは、社會紐帯が破壊されるからである。社會の紐帯の変動を一定の限度内に保つためには、前述せるが如く、成員の補償を出来る限り徐々に

行ふことが必要であり、又成員を出來るだけ、その精神的・肉体的方面に於て類似せしめることが必要である。何となれば類似は社會的結合に於ける一の有力な要素であるから、前の成員と後に來る成員とが比較類似してゐるならば社會紐帶の変動は、そのために減少せしめられるからである。

次に社會の自然的環境が、急激且つ深甚な変動を來たし、成員相互の関係を攪乱せるが如き性質のものでないことを必要とする。勿論人間は自然的環境に対する影響を受けずして生活することは不可能であるからである。

社會紐帶の存続に対しこは、上述の如き成員間の類似又は自然的環境の変動の微弱等の條件は寧ろ第二次的のものであつて、第一次的の條件は社會意識である。如何に成員が異質的なものであらうと、も又自然的環境が変動しやうとも、社會意識の変動が極めて微弱であるとするならば、社會は継続して存在し得るとも考へられる。勿論この場合、成員の類似又は自然環境の変動の多少が、社會意識の変動に対して大いなる外部的條件を為すものであることはこれを忘れてはならぬ。更に社會意識が象徴化又は客觀化されてゐるときは社會紐帶の変動は困難となり、社會の存続を助長するものであることは言ふ迄もない。

最後に社會組織も又社會意識と同樣、その不斷の統制作用に依り、成員の自由なる活動を拘束し、又は指導することに依つて社會に統一を與へ、社會の存續を助長する。社會組織はそれが永續的、固定的の性質を有するものであるから成員相互の關係は概ね此の組織に依つて表面上決定せられるが如き形式を採り、それに依つて、社會組帶が保証せられ得る。かゝる意味に於て、社會組織も又社會の成員の結合紐帶を繼續的ならしめる作用を有するものであると考へられる。

社會學研究參考書

（※印ニハ邦譯ガアル）

工

Barnes, H: Sociology and Political Theory. 1924※

Carver, T. N: Sociology and Social Progress. 1906.

〃 Essays on Social Justice. 1915

Case, C. M: Outline of Introductory Sociology. 1924.

Cooley, Ch: Human Nature and Social order. 1902

〃 Social Organization. 1908

〃 Social Process. 1918

〃 Social Theory and Social Research. 1930

Davis, M: Psycological Interpretation of Society. 1909

J. Davis, Barnes & others: Introduction to Sociology. 1927.

Readings in Sociology. 1927

Ellwood, Ch.: Sociology in its Psycological Aspects. 1912※

〃 The Psychology of Human Society. 1925

〃 The Cultural Evolution: The Social origin and Development. 1927.

Giddings, F. M: Principles of Sociology. 1886※

" The principles of Sociology 1920
" The outline of Sociology. 1924
Small. A.: General Sociology 1905
Sorokin. P.: The Sociology of Revolution 1924
" Social Mobility 1927
" Principles of Rural-Urban Sociology 1927
Spykman: The Social Theory of Georg Simmel 1925
Storck. J.: Man and Civiligation.
Stuckenberg: Sociology 2 vols 190
Thomas. W.: Source book for Social Origins 190
Ward. L.: Dynamic Sociology 2 vols 1883
" Pure Sociology 1903
" The Psychic Factors of Civilization. 1906
William. J. M: The Foundation of Social Science 1920

II

Cole. G: Social Theory.

" Element of Sociology 1889
" Inductive Sociology 1901
" Descriptive and Historical Sociology 1906
" Studies in the Theory of Human Society 1922
" Scientific Study of Human Society. 1924
Hankins F: An Introduction to the Study of Sociology 1928
Hayes. E.: An Introduction to the Study of Sociology.
" Sociology and Ethics 1921
Ogburn. W: Social Change. 1927.
Ogburn and Goldenweiser: The Social Sciences. 1927.
Park and Burgess: An Introduction to the Science and Sociology 2nd Ed. 1924.
Rice: S.T. Methods in Social Science. 1931
Ross. E.a: Social Control. 1901
" Foundation in Sociology 1905

" The principles of Sociology 1910
" The outlines of Sociology 1924
Small A: General Sociology 1905
Sorokin P: The Sociology of Revolution 1924
" Social Mobility 1927
" Principles of Rural-Urban Sociology 1927
Spykman: The Social Theory of Georg Simmel 1925
Stock J: Man and Civilization 1927
Stuckenberg: Sociology 2 vols 1903
Thomas W: Source book for Social Origin 1909
Ward L: Dynamic Sociology 2 vols 1903
" Pure Sociology 1903
" The Psychic Factors of Civilization 1906
William J. M: The Foundation of Social Science 1920

III

Cole G: Social Theory

" Element of Sociology 1894
" Inductive Sociology 1901
" Descriptive and Historical Sociology 1906
" Studies in the Theory of Human Society 1922
" Scientific Study of Human Society. 1927
Hankins F: An Introduction to the Study of Sociology 1928
Hayes E: An Introduction to the Study of Sociology.
" Sociology and Ethics 1921
Ogburn W: Social Change
Ogburn and Goldenweiser: The Social Sciences
Park and Burgess: An Introduction to the Science and Sociology 2nd ed.
Rice S: Methods in Social Science
Ross E: Social Control
" Foundations of Sociology

" Study of Sociology 1873
" Descriptive Sociology, 8 vols 1874-82
" Principles of Sociology 8 vols 1877-96
Wallas : Human Nature in Politics [illegible]
" The Great Society 1914
" Our Social Heritage 1921

III

Bougle, M; Les Science Sociale in allm[illegible] 3. ed. 1912
" Qu'est ceque la Sociologie, 3. ed. 1914
" L'Evolution des valeurs. 1922
Cornejo, M. E: Sociologie générale 1930
Comte, A.: Cours de Philosophie positive, 6 vols 1830-42.
" Sistem de Politique positive, 4 vols 1851-[illegible]
Coste, A.: Les Principes d'une Sociologie objective 1890
Deat, M: Sociologie 1930
Dukheim, E.: De la Division du Travail Sociale 1893

Hetherington and Muirhead; Social purpose 1922
Hobhouse, L. T.: The Metaphsical Theory of the State 1918
" The Rational Good. 1921
" The Elements of Social Justice. 1922.
Hobhouse, L. T. Social Development. 1924
MacDougal, W.: an Introduction to Social Psychology 15 th. Ed. 1921*
" The Group Mind. 1920
Mackenzie: An Introduction to Social philosophy. 1895
MacIver, R. M.: Community 1920*
" Elements of Social Science 1921.
" The Modern State 1926
" Society; Its Structure and Function. 1931.
Ropers: The Individual and the Community 1922
Spencer, H.: First Principles 1826*

Study of Sociology 1873

Descriptive Sociology 8 vols 1874-80

Principles of Sociology 3 vols 1877-96

Wallas : Human Nature in Politics 1908

" The Great Society 1914

" Our Social Heritage 1921

B

Bough M : Les Sciences Sociales en Allemagne

1912

" Quest Leaue la Sociologie 1914

" L'Evolution des valeurs 1912

Cornejo M E : Sociologie générale 1930

Comte A : Cours de Philosophie positive 4 vols 1830-42

" Système de Politique positive 4 vols 1851-54

Carte A : Les Principes d'une Sociologie

objective 1890

Deat M : Sociologie 1930

Dickinson E : La division de Travail Sociale 1893

Hetherington and Muirhead : Social

purpose 1922

Hobhouse L T : The Metaphsical Theory

of the State 1918

" The Rational Good 1921

" The Elements of Social Justice 1922

Hobhouse L T Social Development 1924

MacDougal W : An Introduction to Social

Psychology 15th Ed. 1921*

" The Group Mind 1920

Mackenzie : An Introduction to Social philoso-

phy 1895

MacIver R M : Community 1920*

" Elements of Social Science 1921

" The Modern State 1926

" Society : Its Structure and Section 1931

Ropers : The Individual and the Community 1922

Spencer H : First Principles 1862*

Dunkmann: Lehrbuch der Soziologie und Sozialphilosophie 1931

Engeles : Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft, 2 aufl. 1883*

" Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Kassischen deutsche philosophie *

Einleitung in die Soziologie 1931

Gumplowicz, L.: Der Rassenkampf 1883

" Grundriss der Soziologie 1885

" Soziologie und Politik 1891

Jerusalem, W.: Einleitung in die Philosophie 1891

Kap 7. 8 auflage 1919

Der Gesentzmassigkeit des Sozialem Lebens: Jahrbuch fur Soziologie Volt II

Grundzuge der Soziologie 1930

Kelsen, H.: Der soziologische und der juristsche

" Les Regeles de la Methode Sociologique 1895*

" La Suicide: Etude sociologique 1899

" Les Formes élémentaires de la Religieuse 1912

Lacombe, R: La Méthode sociologique die Durkheim 1926

L'anne sociologique 1898-1912

Matagrin: La Psychologie sociale de Gabriel Barde 1910

Maunier, R.: Introduction a la Sociologie 1924

" La Sociologie générale les lois sociologique 1912

Bard, G.: Les lois limetatives 1890*

" Les lois sociales 1898*

" La logique sociale 1895

" Essais et melanges sociologiques 1896

Worms, R.: Organism et société 1896

IV

Cohem, H.: Ethik und Soziologie 1923

" Abriss der Soziologie 1906

Scheler, M.: Versuch zu einer Soziologie des Wissens 1924

Seidler, E.: Zur sozialwissenschaftlichen Erkenntnis, 1930

Simmel, G.: Über soziale Differenzierung

Soziologie 1908

" Grundfragen der Soziologie. 1920*

Sombart: Soziologie 1923*

Spann, O: Gesellschaftlehre 1914

Stammler, R: Wirtschaft und Recht 1914

Staudinger, F.: Wirtschaftliche Grundlagen der Moral 1907*

" Kulturgrundlagen der Politik, 1914

Tonnies, F.: Gemeinschaft und Gesellschaft 1922*

" Soziologische Studien und Kritiken 1924

" Einführung in die Soziologie. 1931

Vierkandt, A: Gesellschaftlehre 1923

" Handwörterbuch der Soziologie 1931

Von Wiese: Allgemeine Soziologie, Teil I.

Staats Begriff 1922

Kistiakowski: Gesellschaft und Einzelwesen; ein methodologische Studie 1899

Lascaver, S: Soziologie als Wissenschaft 1922

Landshut, S. Kritik der Soziologie. 1929

Litt, Th: Individuum und Gemeinschaft 1924

Mannheim, K.: Das Kommunistische Manifest 1848*

Marx, K.: Misere de la philosophie 1848*

" Lohnarbeit und Kapital 1849*

" Lohn, Preis und Profit 1865*

" Zur Kritik der politischen Ökonomie *

" Das Kapital, 3 Bde. *

Michels, R.: Soziologie 1926

Oppenheimer, F: System der Soziologie, Erster Band, Allgemeine Soziologie 1922

Rickert, H.: Die Grenzen der Naturwissenschaften Begriffsbildung 1902

Sanders, a, E. F: Bau und Leben des Sozialen Körpers. 2 vols 1896

[illegible] Soziologie 1906

[illegible] Soziologie des Wissens 1924

[illegible] schaftliche Erkenntnis 1930

[illegible] Soziologie [illegible]

" Soziologie 1908

Grundfragen der Soziologie 1920*

Lombard: Soziologie 1925*

[illegible] Gesellschaftslehre 1924

Stammler R.: Wirtschaft und Recht 1914

Staudinger F.: Wirtschaftliche Grundlagen der Moral 1907*

" Kulturgrundlagen der Politik 1914

Tönnies F.: Gemeinschaft und Gesellschaft 1922*

" Soziologische Studien und Kritiken 1929

" Einführung in die Soziologie 1931

Vierkandt, A.: Gesellschaftslehre [illegible]

" Handwörterbuch der Soziologie [illegible]

[illegible] Allgemeine Soziologie [illegible]

Staats Begriff 1922

Kistjakowski: Gesellschaft und Einzelwesen; ein methodologische Studie 1899

Krasner S.: Soziologie als Wissenschaft 1912

Landshut: Kritik der Soziologie 1929

Litt, Th.: Individuum und Gemeinschaft 1924

Mannheim, K.: Das kommunistische Manifest 1928*

Marx, K.: Misère de la philosophie 1848*

" Lohnarbeit und Kapital 1849*

" Lohn, Preis und Profit 1865*

" Zur Kritik der politischen Ökonomie *

" Das Kapital [illegible] *

Michels, R.: Soziologie [illegible]

Oppenheimer F.: System der Soziologie

[illegible] Allgemeine Soziologie [illegible]

Rickert [illegible] Grenzen der Naturwissenschaften

[illegible] 1902

[illegible]

Lichtenberger J. Development of Social Theory 1925
Laidle H. History of Socialist Thought 1927
Sorokin P. Contemporary Sociological Thought 1927
Stein Ludwig. Die sozial Frage in Licht der Philosophie
Small, A. Origins of Sociology 1925
Squillace Fiuste. Die Soziologischen Theorien Deutsch von Rudolf Eisler

VI

American Journal of Sociology Chicago
Sociology and Social Research Los Angeles 1926
Social Forces Chapel Hill 1922
The Sociological Review London 1908
(Preceded by Sociological papers
Sociological Society London 1905–7)
Revue Internationale de Sociologie Paris
Revue de l'Institut de Sociologie Bruxelles
Kölner Vierteljahrshefte für Sociologie Leipzig

" Begriffslehre 1924
" Soziologie 1926
" Gebildelehre 1929
Walther, G. Ein Beitrag zur Antrogie des Sozialen Gemeinschaften 1923
Weber, M. Gesellschaft und Wirtschaft 1922
" Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftlehre 1922
" Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie Bd. 1922

V

Barnes and others History and Prospect of Social Science 1925
Barth P. Die Philosophie der Geschichte als Soziologie 1922
Bogardus E. History of Social Thought
Bristol Th. Social Adaptation 1915
Hays E. C. Recent Development in the Social Science 1925

松本潤一郎	現代社会学説研究	昭和
〃	社会学	昭和
鈴木宗忠	社会哲学の諸問題	大正
新明正道	形式社会学論	昭
〃	社会学	
〃	群集会社学	〃
杉山栄	社会科学概論	昭和三年
関栄吉	文化社会学概論	〃四年
土田杏村	社会哲学	〃三年
高田保馬	社会学原理	大正八年
〃	社会学概論	〃十一年
〃	社会と国家	〃
〃	社会学研究	〃
〃	階級及予三史観	大正十四年
田辺寿利	フランス社会学史研究	昭和六年
戸田貞三	社会学 講義案、第一部	〃三年
米田庄太郎	社会学年報（第一巻）	
〃	現代文明人の心理	
〃	経済心理の研究	
	現代社会思想の研究	

Zeitschrift für Sozialwissenschaft Berlin 1898–
Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung Verwaltung und Volkswirtschaft im deutschen Reich. Leipzig 1877–

VII

遠藤隆吉	近古社会学	
〃	社会学原論	
エンサイクロペヂア	社会学	昭和三年
林恵海	ジンメル・社会学的方法論	大正十五年
井森陸平	形式社会学研究	昭和三年
今井時和	社会学大綱	昭和四年
岩崎卯一	社会学序説	昭和三年
加田哲三	近世社会学成立史	昭和三年
小林郁	社会学概論	
小松堅太郎	社会学概論	昭和三年
〃	社会学論考	〃
〃	社会構造の理論	昭和七年
三木清	唯物史観と現代の意識	昭和三年
	社会科学の予備概念	昭和四年